

2次は技術スタッフの全体ミーティングだ。舞台上にカンパニーの技術スタッフ一同と、この日仕込みとバラシをお手伝いして下さる香取市役所の方々が一堂に会し、連絡事項や注意点などを確認。

3搬入作業開始。大木はまず荷卸しのためトラックに入り、市役所の方々に次々舞台道具を渡す。そして舞台監督助手が「そのまま上手まで運んでください」「これはそこに置いてください」と指示を出すのだが、一連の動きの中で、どの技術スタッフにも無駄がない。すでに今回の全国ツアー上演日程も折り返し過ぎ。そのなかで培った賜物なのだろうか、隙のないチームプレイに市役所の方々も「すごいもんだな」と漏らすほど。「これは2人で下から持ってください」「段差は気を付けて」。スピーディに行いながら、お互い声掛けをして安全への気配りも忘れない。



5次はスピーカーの設置作業だ。メインは舞台最前列の上手と下手にあるスピーカー。客席前方用と後方用、「サブウーファー」という低音用に特化したスピーカー、俳優へのはね返り用のスピーカーと、用途が違うものを設置する。また、舞台上部にもスピーカーを吊り込む。照明や幕などの舞台美術を吊るバトンに、一緒に吊るのだ。各所に仕込まれたスピーカーのおかげで、舞台上の俳優たちも問題なく音が聞けるようになっている。



舞台上に吊るされた俳優用のスピーカー(写真上)。隣の照明とぶつからないよう、注意深くバトンを昇降する(写真下)。

全体合わせて150～200kgほどあるメインのスピーカーを、ベルトでしっかり固定。スピーカーをまっすぐ立たせるようにするため、底面に板をかませ角度を調整。



4音響機材が搬入されると、大木も仕込みに取りかかる。まずは大量のケーブルを手際よく舞台上に繋げていく。ケーブルの種類はたくさんあるが、1本ごとに用途が異なり、すべて合わせ50本ほどもあるのだとか。



特集

# 四季で輝こう

今年も3月に、劇団四季技術スタッフ・経営スタッフの新卒・中途採用の募集を行います。今月号では、「働いてみたいけれど、どんな風に仕事をしているんだろう？」という皆さまに向けて、技術スタッフ編と経営スタッフ編の「四季のいちにち」をたっぷりお届けします。気になった方は、20頁からの募集要項をぜひチェックしてみてください！

技術  
スタッフ編

四季のいちにち

vol.4

## 『ガンバの大冒険』音響スタッフ

### ガンバの大冒険

劇場に響く俳優たちの台詞や、迫力ある音楽、臨場感あふれる効果音。

音響スタッフは、物語の音をベストな状態で客席に届けます。

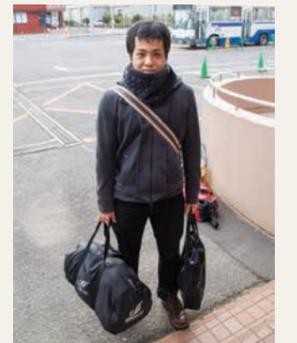
全国公演中の『ガンバの大冒険』(以下『ガンバ』)千葉・香取公演(2017年12月26日)にて、音響スタッフ・大木亮弥に密着取材しました。

8:40

音響・大木が、『ガンバ』全国公演2017年最後の舞台、香取市佐原文化会館に到着。今回、劇団四季が初めて公演を行う会館だ。大木は他の技術スタッフたちとともに、近辺のホテルより徒歩でやってきた。朝から舞台を仕込む必要があるため、前日のうちに香取に入っていたのだ。

入団7年目の大木は、これまで『クレイジー・フォー・ユー』『マンマ・ミーア!』などの作品に携わってきた。本番中のマイク管理、音楽や効果音のオペレートなどを経て、今は俳優のマイクオペレートを担当している。「全国公演は毎回行程も会館も異なるため、毎度同じ段取りで進めるというわけにはいきません。今日は仕込みからバラシ(片付け)まで行う日ですが、特に仕込みには神経を使います。初めての会館ということもあるので、まずはとにかくきちんと音が出るように滞りなく仕込みます」。

会館に入り、続々とスタッフルームに向かう技術スタッフたち。俳優たちが楽屋を持つように、技術スタッフたちにもスタッフルームがある。大木もここでさっそく黒衣に着替え、作業開始。



9:00



1舞台上に向かった大木が最初に行うのは、会館の音響スタッフとの打ち合わせ。「基本的に公演の2～3週間ほど前に会館側と電話で事前打ち合わせをします。そして当日の仕込み開始前にも、細かい部分の最終確認をするんです」。会館によって舞台や客席の大きさは変わるので、それに応じて仕込みも臨機応変に対応しなければならない。電源の場所、使用可能な会館の機材の有無など、確認すべき事項は多数ある。

15:00

会館に戻り、再び調整作業に入る。最終的に音の善し悪しを判断するのは、自分の耳だ。各シーンの音楽を流し、その聴こえ方を確認していく。目指すのは、ナチュラルな音。「ライブなどではがんとはっきりした音が求められますが、舞台では、物語のなかでそれぞれの音が自然に出ることがベストだと思います」。

四季に入る前はコンサートの音響スタッフを目指し、別の音響会社で働いていた大木。芝居やミュージカルの世界には馴染みがなかったが、たまたま仕事で舞台の現場と接する機会があり、興味を抱くようになった。舞台の仕事で食べていくなら四季しかない、門をたたいた。「工業高校に通っていたこともあり、音響の仕組みの理解には困りませんでした。それでも初めてみる機材ばかりで戸惑いましたし、入団してからしばらくは日々の業務についていくので精いっぱいでした。音の聞き分けも始めのうちはまったくわからず、場数を踏んで少しずつ慣れていきました」。



舞台上、客席、ロビーとあちこち移動して、音楽やマイク、開演前アナウンスの聞こえ方に問題ないか確認。音は人の服などにも吸収されてしまうため、本番の客席が埋まった状態でベストの音を届けられるように見越して調整する。



音の確認には、普段自分が最も聞き慣れている音楽を使うのが一番。そのため、作品の1シーンだったり、あるいはまったく関係ない曲だったり、流す音は人によりさまざまなのだとか。

16:30

マイクを装着した俳優が舞台上に集まり、音質チェックの時間。大木は俳優の台詞をひとりひとり順番に聞き、「OKです」とテンポよく調整していく。全員分終わると、場当たり（舞台の立ち位置などの確認）開始だ。

音響スタッフは、俳優のタイミングに合わせて音出しをする。そのため、稽古場での台本の読み合わせの段階から音響スタッフも参加し、ニュアンスや折れ（芝居のセリフの背後にある意識の流れが変化する部分）を考えながら俳優と打ち合わせていくのだが、日々公演を行うなかで、そのタイミングが変わっていくこともある。「このシーン、頭から音ください」「ここ、少し音出しのタイミングを変えても良いですか？」ダンスキャプテンを務める俳優・片伯部春香のリクエストに従い卓を操作し、俳優たちと息が合うよう、確認をしていく。



舞台上で音楽や自分たちの声が聞こえないと、その分さらに声を出そうとしてのを壊してしまう危険性もある。俳優たちにとって音響環境は大事なのだ。

12:00

仕込みが一通り終わり、次は調整作業へ。いよいよ音を出しての作業が始まるのだが、このタイミングで他のセクションのスタッフは昼休憩に入った。この時間帯は舞台上と客席に人がいなくなり静かになるので、音まわりの調整を詰めていく（昼公演など本番前に十分な時間がない日は、ほぼ常にスタッフ総出で作業しているため、そうしたなかで調整を行う場合もある）。

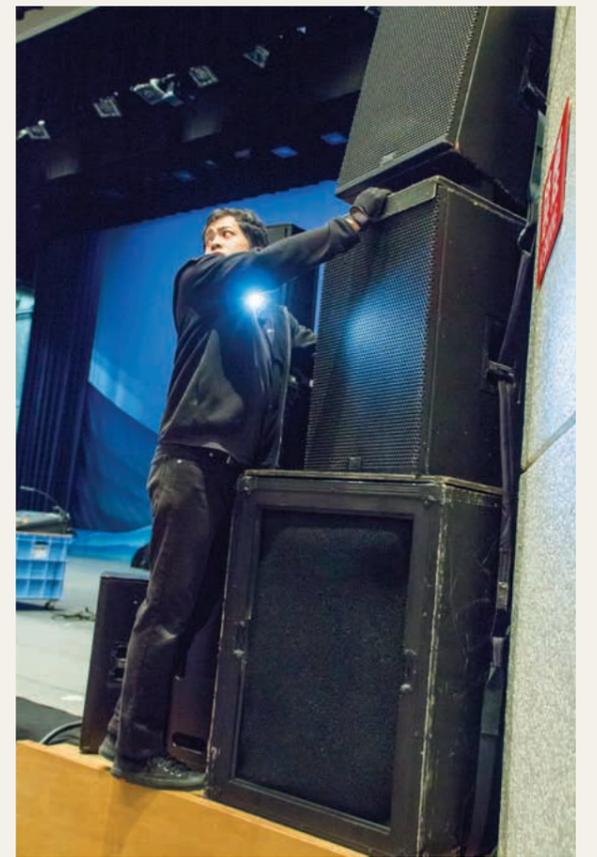


俳優たちのワイヤレスマイクをひとつひとつ確認。ひとりが舞台上でマイクを使って声出しをし、大木がそれを音響調整卓(PA卓)でチェック。マイクの音量や音質を調整する。

音響調整卓(PA卓)。大木が舞台上を仕込む間に、客席まわりを仕込んでいたもうひとりの音響スタッフが設置する。本番中、ここで大木がマイクのオペレートをし、もうひとりが音楽や効果音を出し音量を調整する。



まずは「ピンクノイズ」と呼ばれる雑音を流し、音が人間の聴感にあうように整える。パソコン画面のグラフが均一になるのが理想。



音の調整の前に、スピーカーの向きを微調整。無駄な音の反射をなくし、なるべく客席全体に均等に音が届くようにする。

14:00

一段落ついたところで昼休憩。比較的余裕を持って作業が進んだため、この日は会館近くのレストランで食べることに。



特集  
四季で輝こう

18:00



休憩中は舞台裏に行き、音響に問題ないか俳優たちに確認。



開演。本番中、お客様にきちんと音が届いているか客席の様子を気にしつつ、舞台に集中。

本番直前に、俳優のマイクの電池をすべて新品のものに交換。

20:00

1 終演後、大木はすぐに舞台に向かい、バラシ作業にかかった。仕込み時に鮮やかな手つきで繋げていったケーブルを今度はどんどん引き抜き、客席にまとめて置いていく。自分がバラした機材が他の作業の邪魔にならぬよう、まわりの状況に注意を払いながら、スムーズに進めていく。



2 すべて搬出し終わり、本日の作業はこれにて完了。速やかに退館の準備を整え、技術スタッフは会館の外に集合した。最後にスタッフミーティングがあるのだ。ここで、必要があればその日の反省会や、今後の移動



宿泊についてなどの事務連絡を行う。トラックを見送り、いよいよこの会館ともお別れだ。

22:30

無事に香取公演の1日が終了。明日は横浜市・あざみ野の四季芸術センターに戻り、トラックの荷卸しだ。一時的に稽古場に舞台道具一式を保管し、また2018年からの全国公演へと旅立っていく。こうして1日の全工程を終え、明日も朝から力仕事だが、「これから皆でご飯に行きます！」と大木ら技術スタッフはまだまだ元気な様子。仕事で息がびったりな彼らは、仕事以外の時間でも仲が良いようだ。濃密な時を共に過ごすなかで、仲間との絆は深まっていく。こうしたかけがえのない時間を過ごせるのも、全国ツアーの醍醐味なのかもしれない。最後に、大木から四季を目指す人たちへのメッセージをきいてみた。「これまでになか趣味や仕事に没頭したことがある人は、ぜひ四季に来てほしいですね。ひとつのことに集中した経験は、大いに役立ちます。あと僕が個人的におすすめしたいのは、いろんな本を読むこと。音響スタッフも台本読みが求められるので、読書に慣れておくと良いと思います。音響スタッフとして幸せな瞬間は、2階、3階のお客様の反応があったり、帰り際に子どもたちが歌を歌っていたりするとき。ちゃんと音が届いたんだなと実感できます。皆さんも、ぜひ一緒に舞台作りで得られる感動体験をしましょう。良い意味で変わりものが多い技術スタッフ一同、お待ちしております！」



特集

四季で輝こう